

『大空襲三一〇人詩集』出版記念会・全記録

日時 二〇〇九年六月二十七日十三時三十分～十七時三十分

於 東京・東洋大学白山キャンパス三号館3303教室

参加者総数 六十名

〈プログラム〉

司会 長津功三良、港敦子

開会の言葉 郡山直

第一部 挨拶

早乙女勝元、御庄博実(代読)、森徳治、黒羽英二、

森三紗、原田敬三

第二部 スピーチと朗読

大井康暢、門田照子、浅見洋子、北村愛子、斎藤彰吾、

尾内達也、結城文、塚越祐佳、秋山泰則、くにさだきみ、

名古きよえ

第三部 大空襲・映像詩篇(宗左近「炎える母」朗読)他

第四部 編者挨拶

長津功三良、山本十四尾、郡山直、鈴木比佐雄

閉会の言葉 山本十四尾

港敦子(司会) 本日は北は仙台、南は福岡の方から遠方よりたくさんの方にお越しいただきまして、ありがとうございます。これから出版記念会を始めたいと思います。司会は私、港敦子でお送りします。よろしくお願い致します。

《開会の言葉》

郡山 直 私は、昭和三十六年から三十六年間東洋大学に勤めております。それでその関係で、『原爆詩一八一人集』の出版記念会をして、それ以来鈴木比佐雄さんがどうも気に入ってらしくて、東洋大学で出版記念会をすることになっています。本日は皆さんお忙しい中をおいでいただいて、どうもありがとうございます。

昭和二十年三月十日の東京大空襲を記念して、その時から六十四年、今年三月十日にこの『大空襲三一〇人詩集』が出ました。その出版記念会をこれから持ちますけれども、スピーチをされる方、朗読をされる方々、それから皆さん、どうぞ頑張って下さい。

《第一部 挨拶》

港敦子 では、第一部を始めたいと思います。最初に挨拶としまして、早乙女勝元さんです。よろしくお願い致します。

早乙女先生は作家で、東京大空襲戦災資料センターの館長でいらっしゃいます。

◇早乙女勝元

皆さんこんにちは。今日は『大空襲三一〇人詩集』の出版記念会に参加することができて、たいへん嬉しく思っております。

当初鈴木比佐雄さんからこの企画について電話でお話を伺いました時に、“三百十人”なんて沢山の詩が集まるのかどうなのか、それが集まって一体どういう本になるのかというのは、全く想像が付きませんでした。現実にご本を送られてきて手にした時には、やはり衝撃を受けましたよね。五百二十ページありますか、定価もたいへん安いのですが、その中身たるやそう簡単に読めるものではないと思います。あれを全部熟読なさった方というのは、どのくらいいらっしゃるのでしょうか？ 私も最初の一ページ目から最後まできちんと、というわけにもまいりませんでした。

このご本は『大空襲三一〇人詩集』というタイトルになっていますが、そのタイトルの上の方に小さな数字が出ているのにお気付きでしょうか？ すなわち、一九三七年から今年二〇〇九年—これは要するに、空襲・空爆の始まりの源流・起点とも言えるドイツ軍によるところの「ゲルニカ爆撃」から始まっています。その翌年が日本軍による「重慶爆撃」でしたね。そして、今日の「アフガン」から「ガザ」に至るまで。全体は、申し上げる必要もございませんが、九章に分かれています。一章が海外の戦中編、二章から八章までは東京を始めとして日本全国の空襲・戦災に関するテーマで、最後の第九章が海外編ですけれども今日の問題を扱っているという、非常に総合的な構成になっております。言うなれば、空襲・空爆の時間と空間を踏まえた集大成の詩集と言えるのではないかと思います。

私はこれまで、ずいぶん原爆に関する名作の詩集を読んできました。「生ましめん哉」を始めとして心に残る詩がいっぱいありますよね？ なぜか東京空襲にはそういう詩がありません。詩自体も非常に少ないということを残念に思っていたのですが、今回のご本は、まさに私の期待を満す待望の画期的な一冊かと思いました。

東京大空襲に関しましては、浜田知章さんが言問橋のことを書いておられます。この厚手の本で言うところ九〇ページ辺りではないでしょうか。その詩を読んで、私の言問橋を歩いた日のことを思い起こしました。それは、三月十日から一週間ちょっと過ぎていたかなあという気がします。正確な日取りがどうもよく分かりませんが、松屋デパートだけがまるで焼け野原に奇巖城のように聳えて、まだもうもうと黒い煙を噴き上げていたのを思い起こします。

私は当時向島区寺島町に住んでいて、十二歳でした。学校も勤め先の久保田鉄工所も壊滅状態、もう全滅です。クラスメートの消息も全く分からずじまいになって、確かその時は、友達某君と谷中あたりの親類の所へ引き取られて行ったという友達の消息を尋ねて来られた、というふうに先生から教わったと思います。それで友達一人と歩いて、歩いてというのは、もう乗り物も何もありません。歩いて寺島町から地藏坂へ出て、それから言問団子のあたりから隅田公園を目指し、言問橋を渡って、というふうな歩け歩きのコースを選びました。隅田川はあの物凄い焼死体、水死体、溺死体はほぼ片付けられていて、水面がそれほど凄惨な状況でなかったのを見てホッとしました。でも、隅田公園の桜並木は、物凄い凄惨な状況になっていました。要するに桜並木の枝という枝が、色とりどりの衣類がへばり付いて、それが北風にはためいて満艦飾になっているのです。要するに、隅田川へ避難した人達、例えば船とかなどなど、それから対岸浅草あたりの逃れた人達の身から引き剥がされた防空頭巾や、あるいは被っていた毛布の切れ端や、あるいは掛け布団などが空中に散布したと思われる。それが枝という枝に絡みついて、物凄い寒い北風の中でハタハタ、ハタハタと靡いていて、人っ気はほとんどありませんでした。それから言問橋を目指しましたが、言問橋もまた殆ど人影を見ることはありません。まるで航空母艦の甲板に立ったかのような感じなんですね。もはや言問橋の惨劇の焼死体とかあるいはリヤカーとか自転車とかは既に処理済みでございます。一週間過ぎていきますから。処理済みなのですが、歩いて行く運動靴の下で何やらプチプチと音を立てる金属的な物があって、友達が屈み込んでそれを拾って見ましたところ、それは無数に落ちているんです

ね。要するに、車道と歩道との段差がある所に風で吹き寄せられてきたと思われるそれが運動靴の下で鳴っていたのですが、よくよく見れば足袋の小鉤でした。小鉤だけ山と抱えて来た人がいたのではありませんよ(笑)。当時は靴を履いている人なんか滅多にいません。だから下駄と足袋なんですね。足袋の金属部分だけが焼け残って、小粒のものですから処理できなかった。それを踏みしめて行ったその言問橋の上は、人間の油か血糊が地図のように染みっていました。

「ここで何人くらい死んだんだろうなあ」

私がそう言いましたら、友達は

「そんなこと分かん。誰も教えてくれないもんなあ……」

「俺たちはこれからいつまで生きていられるんだろう？」

「それも、分かん。でも、そう長いことはなさそうだ」

そう彼が言うものですから、

「死ぬ時にはせめて満腹で、腹一杯で死にたいもんだなあ」

「そうでないと腹の虫が啼くもんなあ……」

—などという会話を交えたことを思い起こしました。死体累々を見るよりも物凄い怖い印象で、未だに私の心に貼り付いている記憶のひと欠片です。

東京大空襲では一夜にして推定十万人の都民の生命が失われた、ということになっております。“十万人”というのはとても言いやすい数字なものですから、だからつい“十万人”とひと言で片付けられてしまうのですが、その数の中にはそれぞれ固有の生活と人格があったことを忘れてはならぬと思います。

—そんなことを私が今日特に痛感しますのは、ちょうど一年前の今日、六月二十七日に私の妻が突然死しました。私も神さんも家を出て、神さんは別なサークルに出ていたのですけれども、そのサークルの席上で倒れて、数分で心肺停止しています。病院で死んだのではありませんから、ですから監察医が入って調べた結果、虚血性心不全。心筋梗塞よりももっとも急性です。恐らく五分以内に意識を失ったものと思われました。夜、私は墨東病院に駆けつけたのですけれども、もはや霊安室でお目にかかるより仕方ありませんでした。ほんとうは今日は一周忌ですからちよっと来客が我が家にあるのですが、それは娘に任せて、私はこちらの会に出ようと決意して参りました。

なぜそんなことを話すかと言いますと、一年経ってもまだおかしいですよ、何かまだ嘘みたいな感じで。例えば、下駄箱の靴ひとつ見ても、「今頃どこを歩いているんだろう……」と思ったりしちゃいます。

十万人からの命の犠牲というのは、そう考えてきますと、ゾッとするほど恐ろしい話ではないのでしょうか。なかなかそういう人間的な想像力まで今は及ばぬ時代になったのではないかと思います。いわんや、宗左近さんのように火中に母親を置き去りにして自分だけ命拾いしたという詩人の心の痛みは、どんなでありましょうか。そのことを改めて考えざるを得ません。宗左近さんの詩に「炎えやまないわたし／炎えつづけるわたし」という一節があります。恐らく、この世から息を引き取る瞬間まで詩人の心は痛み続けていたのではないのでしょうか。

宗さんとは何度かお話しする機会があったのですが、私がその時のことを聞きますと、おっしゃらないんですね。『東京大空襲戦災誌』にも宗さんの体験は四十年近い前に特別にお願いしてオリジナルで書いてもらいましたが、その部分だけは書いてありません。私共のセンター(＝東京大空襲・戦災資料センター館)でお呼びして対談をした時も、なかなかおっしゃってくれないのです。それから、徴兵忌避でも宗さんは大層勇気のある行為をしているわけですが、その部分も「どうですか?」「どのようにしてですか?」と聞きますと、「兵隊にならなかつたからですよ」—くらいのひと言で終わってしまうものですから、余程やはり多言したくはなかつたんだろうな、それは言葉にすると相당한痛みを伴ったんだろうなあ、などということを痛感せざるを得ません。

そういう無念の思いを籠めた方々が今、被災者と遺族を中心にしまして「東京大空襲訴訟」、判決を眼の前にしております。その点につきましては、お世話になっている原田先生(註・同訴訟弁護団副団長原田敬三弁護士)が後ほど語ってくれるかと思いますが、今回のご本は、そういう意味

でもっと広く深く活用したいと思います。本は作れば良いってものではありませんよ！ 作るよりもそれをいかに広めるか、いかにして多くの人達の心に届けられるか、その感動を全ての人々の心に広められるか、ということが作るよりもっと大きな仕事としてそれぞれの使命ではないのでしょうか。

今回のご本が、そういう意味で多くの人達、特にできるだけ若い人達の心に残って、これからの平和の力にきっと結び合いますように。ご静聴ありがとうございました。

港敦子 ありがとうございました。

次は御庄博実先生ですが、今日はちょっと体調が優れなくて広島から来られない状況です。代わりに長津功三良さんが御庄さんのメッセージを代読します。よろしくお願いします。

御庄さんは後ほど映像で韓国人被爆者の治療ということで出てきます。少しご紹介しておきますと、広島原爆の入市被曝者でいらっしゃいます。広島共立病院の名誉院長でいらっしゃいます。

◇御庄博実

(以下、長津功三良氏代読)

『大空襲三一〇人詩集』出版記念会、おめでとうございます。

上京して皆さんにお目にかかれるのを楽しみにしておりましたが、去る四月末、突然の血尿で膀胱癌を発症しました。ほぼ二十年前に胃癌の切除を受け、六年前より前立腺癌の治療が続けていますが、再三度の癌の発病は、あるいは六十三年前の八月八日、残留放射能の渦巻く広島で学友、恩師、恋人を一日中探し続けた入市被曝の影響かと思うこともあります。

五月半ばに内視鏡手術を受けました。手術は無事に進み、六月二十七日本日、十分回復して上京できるつもりでおりましたが、年齢のせいか被曝の影響か、手術痕からの出血が予想より長引き体調はなかなか回復しません。本日は出版記念会の席に参加できないことを早乙女先生始め鈴木さんなどお世話をなされた方、及び本日参加して下さいの皆様にお詫び申し上げます。

本日の『大空襲三一〇人詩集』出版記念会がご盛大でありますことを、広島空の空よりお祈りしております。御庄さんより皆様にくれぐれもよろしくとの事でした。ありがとうございました。》

港敦子 長津さん、ありがとうございました。

では次に森徳治様、よろしくお願いします。森さんは十六歳で厚木航空隊少年兵となり、東京大空襲の翌日に焼け野原の下町を歩き実家に戻り、被害の凄まじさに遭遇したそうです。戦争責任を問う詩を書き続けていらっしゃいます。

◇森徳治

本日は『大空襲三一〇人詩集』の出版、おめでとうございます。私もこの詩集に参加させていただいて、大変光栄に思っております。編集出版のコールサック社の方々や関係の皆さんに厚くお礼申し上げます。

解説にも書かせていただきましたが、大空襲の翌日の三月十一日朝、私は海軍の少年兵で神奈川県海軍基地へ転動する途中、上野駅に下車しました。生家が北千住にあった関係でそこに立ち寄り、家族に会ってから神奈川県の基地に入ろうと、上野駅へ来て路面電車に乗ろうと表口に出ると、思わず目を瞠って立ち止まりました。この時に見た異様な光景は、今もって忘れることができません。眼の前に在るべきはずのもの、見慣れた街が無かったのです。街は一望白っぽい原っぱに変わり、向こうに浅草松屋デパートのビルが汽船のように浮かんでいました。路面電車の道まで来ると、架線の電線が切れて蜘蛛の糸のようにぶら下がっていました。この白い灰の原野のような焼け跡は、ナパーム焼夷弾の高い燃焼温度の作り出したものだったのですが、その時の私には何が起きたのか全く解りませんでした。

今振り返って私は、その空襲、東京大空襲の灰の原野の表現するものは、徹底的な破壊と、生きる意味も死の意味も焼き尽くすもの、市民の殲滅を、絶滅を指向したジェノサイドだったと考えます。ジェノサイドを指向した空襲では、市民の殺害そのものが空襲の目的です。そして、それからの戦争はジェノサイドを指向して、空襲死を含めて非戦闘員の死亡は戦闘員の死亡を上回り続けま

す。朝鮮戦争—これは国連の資料ですが、南北合計死者三百五十五万人、非戦闘員の死者二百万人以上。ベトナム戦争—推定死者二百八十万、非戦闘員死者百六十九万人。いずれも非戦闘員の死者が六割を超えています。一九九一年の湾岸戦争は、新しい戦争技術、ハイテク兵器の展開を開示しました。このハイテク兵器は、科学の絶え間ない進歩を戦争手段の開発に向けて努力した科学者の協力によって成り立っています。この意味で、『大空襲詩集』に数人の方が中国侵略の最も冷酷な犯罪の典型として細菌兵器を発明し使用した七三一部隊、石井機関告発の詩を載せているのは、この詩集の幅を広げ問題性の重みを増したものと言えると思います。

とりわけ木島始の「蚤の跳梁」は、戦後詩の最大の長編問題詩であり、『大空襲詩集』には二つのパートを部分掲載しておりますが、全体は十二のパートで構成され、全編五百三十六行という長詩であり、細菌兵器の生みの親という石井四郎陸軍軍医中將をモデルにしている、詩篇主人公は「彼」という第三者名称を与えられて登場しています。しかし石井中將をモデルにしてはいますが、詩篇の「彼」は石井中將と幾つかの部分で違います。先ず年齢は「彼」の方が若干若く設定され、最も大きな違いを戦後に置いています。この部分は『大空襲詩集』にも掲載されていますが、実際の石井中將は、戦後は不遇であり、小旅館の経営などを細々続け昭和三十四年、国立東京第一病院において喉頭癌で亡くなっております。六十七歳でした。一方、長編詩の「彼」は、「すでにひさしく行方不明」ですと書かれていて、アメリカへ免れ生物兵器の研究を続けているらしいことを匂わせて詩は終わっています。なぜ作者は戦後の場面に来て「彼」を石井中將と違う存在にしたのかと言えば、七三一部隊に関わった医学者は石井四郎だけではなく、二千人以上の医学者が大なり小なり石井機関と関係を持ち人体実験を行っていました。彼らは戦後の日本医学界の上層に君臨している。国公立大や私立大医学部の指導教授となり、日本医学の研究をリードしたのです。木島始はこの作品で、石井機関参加医学者のモラルを問いたいと考えて、石井中將と戦後の「彼」を分けたのだと思われます。とはいえ、モラルを問われなければならないのは細菌兵器研究の医学者だけではなく、原水爆研究は言うに及ばず、ハイテク兵器の研究科学者も同断であります。

本年四月、オバマ米大統領はブラハにおける演説で核の無い世界 “核ゼロ指向” を言明、「唯一の核使用国としての道義的責任」という言葉を使い「核兵器の無い世界を目指す」と宣言しました。オバマ大統領声明が希望になるかどうかまだよく分かりません。けれども私は、このことに大変注目したいと思っています。今まさに世界は変わらなければならず、変わり得ると信じたいと思います。この時『大空襲三〇人詩集』の発刊をみた意義は限りなく大きく、核の無い世界平和達成への道に高い道標を与えるものであります。詩集には、平和確立のために決して消し去ることも忘れ去ることもできないものがあることが刻まれていて、この空襲の炎の中の「絶対恐怖」というべき体験を現在進行形で完治することこそ、核ゼロ実現への必要不可欠な道程であることを語っています。

『大空襲三〇人詩集』は、空襲の残酷な傷跡を語り続けることで世界平和を目指す人達に問題意識の深化とそれに向かうための勇気を与え続ける詩集になると思っております。—ありがとうございます。

港敦子 ありがとうございます。

次は黒羽英二様、よろしくお願いします。黒羽さんは、十三歳で東京大空襲を体験されました。最新詩集『移ろい』でも「空襲なんぞ恐るべき—東京大空襲大虐殺の記憶」で空襲の悲劇を語り継いでいらっやいます。

◇黒羽英二

短い時間でいろいろ語りたいことがあり過ぎますので、ちょっと趣旨を変えます。

昭和三十五年に、私はまだ二十代で、下町の高校に勤めて五年目でしたが、開校六十周年記念式典のアトラクションに、徳川夢声等芸能人を呼びました。この学校は永代橋のほとりにありましたので、五万五千人も死んだ本所、深川の入口で、教師にも生徒にも三月十日に親兄弟を亡くした者がたくさんいて、その体験を始終聞かされていました。そんなこともあって、空襲にまつわる話をしてく

れるようにと依頼したのだと思いますが、壇上の夢声は両手を広げまして、「うおんうおん……」と三分間ぐらいやってるんです。聴衆はゲラゲラ笑い出したんですけど、B29の爆音の真似をしていたんですね。そしてその後ボソボソと短い話をして壇を降りてしまったんです。あの恐怖のB29の爆音の他は何も喋りたくなかったんでしょうね。その夢声の真似をするわけではありませんが、皆さんへのお土産に、詩のタイトルにもした「空襲何ぞ恐るべき」を歌います。声はひどいですが、歌詞だけは、よく聴いてください。一番と二番だけ歌いますが、三月十日の悲劇の予告のようにも、今になって聞くと、思えるんですね。

空襲なんぞ恐るべき
護る大空 鉄の陣
老いも若きも今ぞ起つ
栄えある国土防衛の
誉れをわれら担いたり
来たらば来たれ 敵機いざ

空襲なんぞ恐るべき
つけよ持場にその部署に
われに輝く歴史あり
爆撃猛火狂うとも
戦い勝たん この試練
来たらば来たれ 敵機いざ

これは難波三十四陸軍中佐が詞を作りまして、戦前から大活躍した飯田信夫の作曲です。そして、何と、昭和十六年十二月にビクターレコードから出たのがたちまち流行って、もう戦争が始まっていますが十七年一月に伊藤武雄がコロンビアから別のレコードを出しています。さらに合唱に向いているということで、合唱団が入りまして、十七年二月のシンガポール陥落の頃ですが、徳山璉が歌って、更に全日本に普及して行って、防空演習の始めには必ず私たちは歌わされるんです。

昭和十二年のゲルニカ空襲から始まって、十三年、重慶空襲が始まり、十四年に東京では、「警防団」を作り、十五年七月に「隣組組織」というのを十世帯一組で一班を構成して、十月に徳山璉が、例の「とんとんとんからりと隣組」という歌を歌いまして、私は小学校三年生でしたけれど、田園スタジアムという多摩川園へ向かって走る東横線からよく見えた小さな競技場で、徳山璉の歌唱指導の下に、皆で歌いながら帰ってきましたけれども。この歌は何と作詞が岡本一平で、作曲は、これまた飯田信夫だったんですね。この歌は日本中に広まって行って、同時に警防団組織から隣組、今でも回覧板というのがありますけど、普及して行って、「空襲が来ても自分達の手で消せるんだ」という安易な考えで、防火用水、バケツリレー、炎をたたき消す大きなハタキで何とかなる、というような、今から考えれば信じられないようなあまい考えで空襲に臨んだことが、死者の数を増やしてしまったわけです。しかし三月十日の空襲の、あまりのものすごさに焼夷弾で火事が起こっても、消火より自分の生命を護るように、と指令が変わったために、五月の東京大空襲は、来襲B29も多く、投下焼夷弾も三月十日より多かった割には死者の数は減ったんです。本所、深川二つの区だけで五万五千人の死者を出した原因の一つに幼稚な消火活動もあったのだと言われています。

ここで空襲体験を語る前に、話を飛ばして、死者の数のことについて私見を述べてみたいと思います。先ほど早乙女さんが、今日奥様の一周忌と重なったというお話をなさり、奥様という方は早乙女さんにとって掛け替えのない唯一人の方であったというお話がありましたが、私も三月十日に、昨日まで英語を教えていた魅力的な英語の野村先生を亡くしてしまったことから思ったのですが、昭和十七年四月十八日のドゥリットル空襲から数えて百二十二回(または百二十四回)とも言われていて、死者十一万五千人以上とも言われていますが、死者は、合計何十万、何百万以上いようと、結局たったひとりなのだということを言いたいのです。掛け替えのない生命は、誰にとってもたった一つであり、その集積が何十万、何百万になる、ということであって、その逆であってはならないということな

のです。

つい先日、三十代の女性カメラマンが下町の公園の一部の土の盛り上がりを見つめて、土地の人に協力して掘り起こしてみると、数体の、空襲被害者と思われる遺骨が出てきたと報じられていました。このように、死者の累計数は今なお確定を拒んで増え続けているわけです。こういう事実を知れば知るほど、南京虐殺三十万、ユダヤ人虐殺六百万という数字も、中国人の学者が「日本人は数のことばかり問題にするが、数というのは被害者の心理的な数字なのだ。理不尽にも生命を奪われた被害者たちの、加害者に対する恨みと憤りの気持ちの集積があつた数字になつてあらわれたのだ」という話を聴いて、さこそと思ひ当たることができました。一昨年シンガポールへ行った時、チャンギーの、今次大戦中、イギリス軍の捕虜収容所だった建物をそのまま博物館に使用している、あまり日本人の行かないところへ行ってみると、ロコール運河の上に、中国人の生首が五つ並んでいる写真が展示されているのを見ました。日本人独特のやり方で、見せしめに中国人の首を晒したもののように見えたが、ホテルのフロントにいたマレー人の中年の男が「親父からその晒し首の話を知っていたが、中国人は戦争中は日本人の敵だから、という理由で、何かの罪状で処刑されたんだろうが、マレー人でそういう目に遭った者はない」と話すのを聞きました。この見せしめの晒し首を見た中国人が生き延びて、その憎悪が、晒し首五はたちまち五十になり五百に膨れあがつて行くありさまは眼に見えるようですが、それでもなお死者はひとり、生命はひとつなのだ、と私は言い続けたいのです。東京無差別虐殺命令実行者のカーチス・ルメイ、そしてその所属国家アメリカ合衆国に対して、東京大空襲大虐殺の死者は十一万五千から百十五万に膨れあがらせてわめき立てても、黒焦げにされたたった一つの生命を蘇らせることはできません。ただ三十数歳のアイリス・チャンが「レイブオヴナンキン」を書き、その中に日本人に対する憎しみの記述、数字を読み取った時、彼女の父母、祖父母の憎しみと憤りが、子の、孫の口と手を動かして語っているのを感じます。江沢民が早稲田大学で講演した時、中国人の死者の数がまた殖えた、と怒った記事を読んだことがあります。江沢民青年が祖国を蹂躪して行く日本に対する憎悪の念が数字の増大を呼び起こすのは自然の成り行きかもしれません。

次の話はヨーロッパでも日本でも行われた戦闘機による「機銃掃射」ということについてです。ドレスデンが有名になったのは三万五千という死者の数もありますが、二月十三、十四日と二日間にわたって逃げまどう老人子供を屠殺するように丁寧に狙い打ちして、超低空で近づいて射殺しまくったことです。戦争終結後の利益分配の比率を高めるためにだけイギリスが採ったやり方ですが、日本でも爆弾焼夷弾で、殆ど虫の息になった都市でも農村でも超低空で操縦士の顔が見えるほど迫ってきたグラマン戦闘機によって、老人少年少女等が屠殺場を逃げまどう家畜同様の姿で射殺されて行きました。もちろん私も何度も命拾いましたが、九十九里浜米軍上陸予定地点から三十キロの山の中で陸軍将兵指揮下に身の丈二倍の軍需物資隠匿の大穴掘りを空襲下にも続行していた時、県立中学三年生の少年がグラマンに射殺されました。早乙女さんが書いているように「内地は戦場だった」から、臨時少年兵とも言うべき中学生の私達としては当然の運命ではありましたが。この空中ハンティングとも言うべき屠殺や、逃げ場のないようにあれほど広い東京東部の周辺部を焼夷弾で逃げ口を塞ぐために焼いておいてから、火の囲いの中心部を逃げまどう老人女子供(男性は戦場に出て少なかった)を焼き殺して行く残忍なやり方で、二時間半で十万人という死者の山を築いて行くやり口を知った時、カーチス・ルメイ個人を突き抜けて、ヒトという名のサルの変種の最期の姿を見せつけられることになるのです。

大分話が広がり過ぎましたので、元へ戻して締め括りたいと思います。

三月十日は北風の吹きまくる寒い夜でしたが、十時半に警戒警報が鳴って、十二時八分から二時三十七分までの二時間半、うおんうおんうおんと低空飛行で巨大怪鳥B29の群がゆっくり通り過ぎる姿を、きれいなもんじゃなか、などと声を出して感嘆している近所の人の声を耳にしながら防空壕を這い出したのは、焼夷弾の他に落とされた爆弾のせいか、安普請の防空壕が、ズズズンという爆音とともに崩れてきて壕の外へ放り出されたためでした。焼夷弾による火焰地獄は朝の五時まで続き、その炎の渦からは六〜七キロ離れているはずなのに、オーロラに似た夜空に映えるB29の巨大な姿の群と今なお耳の奥に残る、あの、うおんうおんうおんという音が、色濃く私の体に焼きつけら

れているのは、どうしてだろうと不思議に思うことがあります。

昭和十九年十一月二十四日から東京空襲は始まっていて、初めは神田美土代町とか狭い場所だったせいもあって、京王電車の千歳烏山にあった都立千歳中学の一年生だった私は同級生と、時には一人で、何度も焼跡を見に行きました。死体の処理が間に合わないで、トラックへ黒焦げ死体を放り込んである場面に出くわしたこともあって、後で詩に書いたりしました。

三月十日の後で、一番のショックは、これはその後一年以上も続いた光景ですが、今では春のうらの隅田川に戻ってしまいましたが、遊覧船の発着所にもなっている隅田公園が、言問橋から水の中へ飛び込んだ人たちの死体や、あたりの黒焦げ死体があまりにも多すぎて処理しきれずに、巨大な死体の山(これを死体のボタ山と私は名づけましたが)が幾つも円錐形に立ち並んでいて、その前に置かれた線香立てから、まるで煙幕のように濛濛と煙が立ちこめて眼が開けていられないほどだった無気味な地獄の風景でした。眼をあげれば、東武電車の「隅田公園」駅が、ぺろぺろの骨がらみの姿で、巨大な怪獣の死骸のように剥き出しの鉄骨を曝け出していました。この風景も私は幾つもの詩に書きました。

常磐線のぎしぎし言う木造客車に乗って、三河島、南千住のあたりの高架コンクリートスラヴから遙か彼方の南方を見れば、一面の焼野ヶ原で東京湾まで見通せた記憶が残っていますが、月島までは六キロぐらいだから、あながち幻覚だとは言えないはずで、このことも私は詩に書きました。

最後に、この時の強烈な印象とともに呼び起こされた歌の一部を口にしてしめくりたいと思います。それは、東京都が府と市が合併して生まれるまで歌われていた東京市歌の一節です。

……月影入るべき山の端も無き

昔の広野の面影いずこ……

どうか、東京大空襲体験者の皆さんはもちろん、その時生まれていなかった人も、あるいは遠く地方に住んでいた人も、親兄弟親戚の人の話を聞いて、あるいは本や映像を見て、老いも若きも、大いにこの惨禍を、文字に綴って後世に伝えて行こうではありませんか。私達は、ロシア人、オフチニコフの「相生橋の影」によって、ここにいらっしゃる長津功三良さんの詩によってヒロシマの惨禍を共有することができるのですから。

私達東京大空襲体験世代の者が、詩に、小説に、劇に、その惨禍が、陰に陽にしのび込んでしまうのは当然としても、昨秋、評判の良かった劇団「燐光群」の「戦争と市民」の作者、坂手洋二氏は敗戦の十八年後に地方都市に生まれた劇作家ですが、たとえ私達と同世代の主演女優、渡辺美佐子氏の体験助言があったとしても、私達空襲世代の観客を充分感動させることに成功したのですから、どうか空襲体験のない世代の詩人も大いに「空襲」に取り組んでもらうことを期待して、本日は終わります。

港敦子 次は森三紗さんをご紹介します。森さんは、宮沢賢治の親友だった森荘巳池さんの娘さんでいらっしゃいます。宮沢賢治イーハトーブ学会前副代表理事で、この度の『大空襲三一〇人詩集』では宮静枝さんなど東北の空襲体験をした詩人たちを紹介して下さいました。よろしくお願いします。

◇森三紗

このように話す機会をいただきありがとうございます。『大空襲三一〇人詩集』に参加させていただいて、読んでみますと本当に一人おひとりの作品の尊い魂の叫びが私には響いてきたのでございます。今日は三つ四つまとめてできるだけ手短にお話したいと思いますが、いただいている時間は十分でございますので、その範囲内でできるだけ話させていただきたいと思います。

先ず一つ目は、司会の港敦子さんからお話がありました通り、この『大空襲三一〇人詩集』の宮静枝という詩人のことです。六月七日にアンソロジー詩集の出版記念会がありました。誕生日は五月二十七日なのです。それで、どのような詩人かということをご紹介しておきますが、宮沢賢治が亡くなった一九三四年の九月二十一日、亡くなった次の年です。亡くなったのは昭和八年ですから、次の年の昭和九年、東京・新宿新道の江島亭という所で草野心平さんという、宮沢賢治の顕彰を一番先

にスタートする方ですが、その方達を中心にして追悼会をやるわけです。その時に、ここに写真があります―隣にるのが銭形平次の野村胡堂、岩手県出身です。紫波町出身の同じく「さざんかさざんか さいたみち」(「たきび」)の巽聖歌。一番前に遺影を抱えて記念撮影をしている尾崎喜八。そういうふうな詩人たちと一緒に永瀬清子という岡山の詩人が写っています。その永瀬清子さんの隣にるのが南城幽香(宮静枝さんの戦前のペンネーム)で、ただ二人の女性です。共通する点は、一生涯詩を書き続けたということです。文学を、そして人間の命、愛をテーマに。そして宮さんの場合は「平和」というテーマがありました。それで永瀬さんも、共通点は二人とも空襲に遭っていることです。宮静枝さんは私の師だと思っている方です。そして、やはり東京に出ていらっしやってから空襲で自分で書いた詩の原稿を全て失ってしまいます。愛聴したレコード、『春の修羅』という不思議なタイトルの―「春と修羅」なのですが、“の”のついた珍しいのを持っていたんです。それでこのお二人は生涯を通じて文学を命をかけて書き続けたということの共通性と、空襲に遭われた。永瀬さんは岡山で空襲に遭われるわけですね。「あけがたにくる人よ」というもうレクイエムの凄い詩だと私は思うわけなんです、その詩。宮静枝さんの場合は、このたび東京大空襲だと全国の大空襲に遭った、もちろん東北地方盛岡も花巻も釜石も、釜石などは二度も五千発の艦砲射撃や機銃掃射とかにやられてしまうわけなんです、そのことを私は「海受難―釜石が焦土と化した日」ということで書いておりますし、それから「ゴーシュの破れセロ炎上―花巻大空襲」ということで宮沢家がどのようにして母屋を焼かれて原稿を守ったかということを書いております。

それで、宮さんの話に戻りますが、宮静枝さんは十冊の詩集を出しています。地方にお住まいでいらっしやいましたのでなかなか評価されませんでしたけれども、今回十冊の詩集から編集委員会をたちあげアンソロジー詩集を刊行しました。特にこの中には第十詩集の『さっちゃん戦争を知らない』というとても優れた平和を訴える、九十三歳の時に確かお出しになっていると思いますが、五十の章に分けた詩集を出されております。そのように地方に於いてもどうしても、先ほどの早乙女さんや前のスピーチなさった方々がおっしゃっているように、平和の声を届けておきたいという祈りの心を永瀬さんも宮さんもお二人とも持っていたのではないかと私は思います。それは根本には、宮沢賢治の「世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない」という人類に課した、「農民芸術概論綱要」の中の一節があると思います。後で斎藤彰吾さんが朗々と素晴らしい詩の朗読をなさいますのでお任せして、是非ぜひ大空襲の宮静枝さんのところを読んでいただきたい。特に《重慶、東京、ガザ…400編を一冊に》という東京新聞三月三日号の出だしに宮さんの「火の敷き」という詩があります。

〈放たれたから燃えるほかなかった火の敷き／殺しつくし焼きつくしていのちはかけられない／残ったのは白い街の区画だけ／区画は上野まで続いた〉(「火の敷き」より)

「火の敷き」という、火が命を燃やしてしまうという恐ろしい性質を持っているという本質を、この詩人は見抜いていたのではないかと私は思います。

二つ目のお話は、この『大空襲詩集』というタイトルはとても素敵だと思います。国際的視座それから日本人のみしか発信し得ないものも全て含めて「何々の大空襲」ではなく総括している、ということだと思います。それで、一連のそれはやはり何と言ってもコールサック社が日本語、英語で『原爆詩一八一人集』を世界に問うた。英語の訳者の話を聞いたら、本当に夢に出て来るくらい苦しい翻訳の作業だったと私はお聞きしております。本当に辛い作業だったと。それをアメリカ大統領のオバマ氏とかそちらの方にも発信しているということを伺っております。その『一八一人集』を、昨年度宮沢賢治賞イーハートブ賞ということで九月二十二日に表彰式がありまして、私はその時に長津さん、山本さん鈴木さんは三人の同志です。平和を世に発信しようという場合、一番根本の同志がいないと、パートナーがいないと祈りは実りません。そして今の皆さんのここにいらっしやる人たちへ呼びかける文学の力、文字の力、魂の力こそが平和を発信していくのだということです。この受賞された長津功三良さん、山本十四尾さん、鈴木比佐雄さんの三人に取材をしました。その時に、「六十何年ということではない」「風化させてはいけない」ということを三人とも熱心に話し合い、企画し、広島生まれの故浜

田知章の十五年前の「平和の哲学を発信せよ」—これは素晴らしいフレーズだと思います。思想だと思えます。これからスタートしているということをお聞きしました。そして英訳の労をとられた郡山直先生それから結城文さん、水崎野里子さん、大山真善美さんという方々のご苦勞をここで私はもう一度噛みしめてみて、感謝の気持ちとこれ無駄にしないで世界に発信していかなければならない。日本人の受けた被害を忘れてはいけなくとも、国際的視座、歴史的視座に立つてこれからずっと私達は発信し続けていかなければならないと考えております。

宮さんはこのように短歌を書いています。

ただひとつ命うちこむことのあれそにわが命すべて捧げむ

一分かっています。皆の心は分かっています。それは、平和を望む心なのです。これは宮さんが石川啄木が十四歳の私の恋人だということで短歌からスタートなさっておりまして、非常に素晴らしい短詩をもいっぱい書いていらっしゃいます。

もう一つだけお話しさせていただきたいと思えます。高村光太郎という人です。この人は、原子朗先生は私に「あの詩人は戦犯だ」とおっしゃったのです。あの方は長崎で自分のお兄さんを亡くされていますから、非常に厳しい評価の仕方をなさって、ザクツと刺さったんです。この五月の十六日、十七日に、宮沢賢治学会イーハトーブセンターが今高村光太郎展をやっておりますが、その時に私は宮沢家の悲惨な様子を宮沢賢治の弟の清六という方の娘さんにインタビューをしていました。その時に、高村光太郎は二度も羅災されている。東京の四月十三日にアトリエ。智恵子の切り絵だとか智恵子のだけを真壁仁とか親しい人たちに分けて疎開し、自分の彫刻の原型、それからもうすぐ出版するであろう原稿、全ての物を焼き払われて、そしてほうほうの体で花巻の宮沢家を頼ってきます。それは「雨ニモマケズ」を、桜という所に碑が建っているんですが、その揮毫した関係で宮沢家とはかなり深い関係がありました。それから文圃堂版の全集の実現を非常に熱心に思っていて、草野心平は貧乏でしたから高村光太郎が「お前行って来い。あの原稿をなくしてはだめだ。行って来なさい」ということで初めて花巻に行く。そこからスタートしているわけです。そして、全て失った高村光太郎は宮沢家で何を良いことをしたのか？ —罪滅ぼしだったと思えます。それは、賢治の原稿を決して失ってはいけない、これは人類に発信していくものなのだとということで、人の歩くくらいの防空壕を、五月の十五日にほうほうの体で逃げて花巻に来るわけですが、その時に宮沢家に提言するのです。そして一生懸命に防空壕を掘ってそこに全て、とにかく原稿だけは入れましょうということで運びます。でも、母屋に残された「セロ弾きのゴーシュ」の破れセロや、農民芸術概論など八月十日の終戦直前の空襲で原稿以外のすべての遺品を消失しています。私の父は賢治に宛て二十通余り手紙を出しています。私の家にも賢治から二十通書簡があったのです。結局、父が賢治宛に出した書簡は焼失のため往復書簡の研究がならないという悲劇があります。いかに戦争が文学的にも芸術的にもその作品とか全ての美を破壊してしまうのか。貴重な命、人々の生活、絆と同時に人が一生懸命一生をかけて作る芸術的な作品までも破壊してしまうということを、私達は決して忘れていけないと思えます。

港敦子 ありがとうございます。

第一部の 最後になりますけれども原田敬三さん、よろしく願います。原田さんは、東京大空襲訴訟の主任弁護士でいらっしゃいます。宗左近さんの詩を引用し、訴状を執筆されました。

◇原田敬三

裁判を起こしたのは、二年前です。既に結審しております。あとは判決を待つだけです。

東京空襲裁判、「それだけの被害だから、勝てるのは当たり前だよ」と思っているのか、「大変な裁判だな」と思っているのか、皆さん方はどちらなのでしょう？

この裁判、実は、引き受ける弁護士がなかなかいませんでした。早乙女先生の隣に住んでいる中山弁護士さんが主任です。その他、原告団の方でお願いした弁護士で弁護団を組み、十人くらいの常任弁護団がようやく集まりました。

裁判というのは皆さんご存知だと思うのですが、交通事故が起きた時に、民法とか法律があってその法律に該当するから、救済して欲しい、裁判所に勝たして下さい—こうやりますよね？ いまの日本では東京空襲の民間被害を救う法律はありません。東京に限らず全くありません。従って最後に、ではどういう法律で救済しろというのか？—無いんですよ。そこを何とかと中山弁護士中心の十人ほどの弁護団ができました。私は六十五歳ですが、平均年齢七十二歳の原告団。このまま声を挙げずに死ぬのは嫌だ、死ぬに死ねないと、「何はともあれ裁判を起こしてくれ」ということです。

裁判を引き受けて、私は実務を担当してちょっと自分で調べて見ました。東京大空襲、『浅草の空襲で十万人焼け死んだあの事件』。入口からもうぶつかりました。待てよ、狩野光男さんが描いた絵を見るとすぐ分かるのですが、東京空襲で死んだのは“焼死” だけではありません。溺死、それから窒息死などなど、死んだ形だけでも幾つもいくつもある。

事実に基づかないと裁判は成り立ちませんから、そこから引っかかってしまいました。はっきり言って、これほどやりにくい裁判は無いのです。歴史的な傾向もあります。それも調べなくてはいけません。空襲の歴史はいつ始まったの？ などなど何はともあれ辿り着いて、私なりの事実論をまとめました。

私は常任弁護団の一人です。「焼夷弾」「収束焼夷弾」—これをなぜ「クラスター爆弾」って言わないのか。そうだと他は弁護士は言わない……私一人しか言わない。クラスター爆弾反対は現代的課題ですが、最初の間違ひなく大型の収束焼夷弾はクラスター爆弾です。三十八個のナパーム焼夷弾が収束されている。そこから焼夷弾がパッと空中に散って中に入っているナパーム、その当時はガソリンが入っている。スタンダード石油という民間会社がガソリンを直接に兵器として利用するにはどうしたら良いかということで、そこが開発した武器が焼夷弾です。今は中身がどんどん変わって、ベトナムの時は枯葉剤になって、今は要らなくなった核の廃物利用というのですか。

—などなど、最初の出发点から勉強しました。

事実を調べても、自分で判断をしなければならなかったことがあります。それは、「なぜこれまで空襲の被害やその救済が国民的な世論になり公にならなかったのか」ということです。どこかに書いてあるわけではありません。考えました。それで考えたところ、不完全ながら訴状に書きました。そこをご紹介致しておしまいにします。

〈被害実態が公にされていない理由〉

東京大空襲の被害実態が公にされていないことに対していくつかの理由が重なります。

第一は、戦時下において軍が被災事項に箝口令を敷いて事実を隠蔽したことです。石川光洋さんという警視庁の写真撮影担当の方が撮られた写真、これが唯一の当時の現場の写真です。民間人が写真を撮っても特高警察に取り上げられてしまう、連れて行かれるだけです。警視庁の方だから隠せた。しかし国民には徹底的に隠蔽されました。

第二—戦後日本を占領したGHQ。これは、自分の徹底した殺戮戦を全く明らかにすることを占領下許しませんでした。原爆被害が明らかになったのは一九四九年で、「長崎の鐘」などがありますが、その時でさえ東京空襲の実態はプレスコードを根拠に報道を禁止し明らかにされなかった。これが大きな理由です。

第三—家や家族が死んで、被害を訴える当事者がこの世に無かったということです。十万人死んだ中には一家全滅の方が沢山います。その人達は訴えようがありません。

第四—膨大な被害者の遺体がきれいに片付けられて、他の目に曝されないように匿われてしまったことが挙げられます。東京都の手による仮埋葬の掘り起こしもあったのですが、それは隠されたまま行われておりました。

第五—生き延びた人達。これは、実は私達の依頼者の原告団であるのですが、この人達が国から生活補助を一切受けなかった為、自分で生きることへ精一杯で、その他の社会的な手が差し伸べられないために世に訴えることができなかったわけです。裁判の費用は弁護士手弁当です。一人一千万円の請求なので、それでも勝てば弁護士費用が出ます。

それでも、一人五万円の裁判実費を捻出できない、ぎりぎりの段階で、おとし三月十日の直前で原告になることを諦めた方さえいるのです。こうして、裁判を起こすのが人生の終盤になったことをご

理解いただきたいと思います。

第六に、トラウマ以上に精神的に大変だったということがあります。

訴状にはその典型例として、宗左近氏を挙げました。訴状のその部分を読みます。

《東京空襲当時、兵役拒否し在京していた東大生、宗左近は五月二十五日の空襲の日、共に逃げた母の手を離したために焼死させたとの自責の念で苦しみ続け、その気持ちをまとめた『長編詩 炎える母』を出したのは、実に二十二年後であった。次の十七行はその冒頭の一頁である。

献 辞 母よ／あなたにこの一巻を／これは／あなたが炎となって／二十二年の／燃えやすい紙で
つくった／あなたの墓です／そして／わたしの墓です／生きながら／葬るための／墓です／炎えや
まない／あなたとわたしを／もろともに／母よ》

港敦子 ありがとうございます。もっと聞いていたいのですが。

第一部がここで終わりましたと予定だと休憩を入れたいのですが、時間がかかなりオーバーしてしまっているのです、このまま第二部を続けさせていただきます。

『大空襲三一〇人詩集』出版記念会・全記録

《第二部 スピーチと朗読》

港敦子 では、スピーチに入ります。

初めは大井康暢さんです。大井さんは、東京大空襲の惨劇を目撃した経験を詩「風景」に書き記しました。静岡で長年詩誌「岩礁」の編集発行人をされています。よろしくお願いします。

① 大井康暢

時間が無いので、朗読だけさせていただきます。

風 景 ―三月十日―

見渡すかぎりたぶん数里平方
死骸の畑が続いている
眼が痛くただならぬ異臭に胸がむかつく
総武線の土手にしがみついて息絶えた人型たち
水と酸素を求める姿勢で数限りなく
どこまでも続いている
折り重なり這いつくばりがきしみながら
どの死体にもぎりしめた真っ黒な拳を
一様に空に向け叫び逃れる恰好で倒れている
早春の冷たい風が吹く陽光のなかで
はらりと眼が剥がれ鼻が崩れ頭蓋が割れて
灰が舞い上がり形がなくなる
はがれるたびにうすくなり
ついに塵となって消える
トラックは死骸を粉々にしのろのろと進む

二十台の軍用トラック

五十名の兵士と軍用乾パン満載の俄造りの救援部隊である
黒い風景の所々に何かが動く
土を掘って食物を探しているのだ
手ぬぐいで口元をかたく縛っても異臭は体内に染みる
十字路に止まったトラックは動けない
どこから集まったのか何時の間にか
何十人となり何百人となった

黒い生きものたちに取り巻かれる
白地に赤く憲兵と書きこんだ腕章も
何の役にもたたない
蝗のようにトラックにしがみつく奴らを突き飛ばし
払い除けてもよじ登ってくる
はじめは乾パン一袋を貰おうと
おとなしく待っていた隊列だったのに
奇跡的に命拾いした一匹の飢えた狼が乱入し
たちまち列は乱れ
すさまじい地獄図絵の再現である

蠅よりも執拗にむらがり
乾パンはたちまち消え失せる
二十台のトラックは唇をわななかせ
恐怖に頬を引きつらせた五十名の兵士を乗せて
黒い死骸の野原をいのちからがら
青山の師団司令部へ逃げ帰った
無言のまま焼け跡に散ってゆく
途方に暮れた
黒い疲労と絶望を残したまま
亀戸周辺荒川三角州地帯
肌も凍る早春のたそがれである
(『大空襲三一〇人詩集』138頁)

港敦子 続きまして門田照子様、よろしくお願いします。今日は福岡からいらっしゃいました。門田さんは福岡空襲の体験者であり、その修羅場の体験を基にした詩「火災忌」でこの度はアンソロジーに参加されています。方言朗読詩のCDを出されて、大変版を重ねているそうです。

② 門田照子

私は福岡生まれの福岡育ちで今も福岡に住んでいるんですけども、たぶんそのうちに福岡の土になるか天に昇るか分かりませんが、ずっと福岡にいてのではないかなと思うんです。そんなふうに福岡で長く暮らしておりまして日常生活には全く困らないんですが、毎月雑誌を送られてきたり同人誌をいただいたりしますと、それに詩の会とか詩の朗読会のお知らせとかがありますよね？ そうしましたら、何かやはり、それは大抵関東とか関西とかが多いものですから、もう少し近かったらと思って残念なことがしばしばあります。でも今日は一年振りに上京できて皆様にお会いでき、本当に良かったと思っております。もう時間的には「何とかなる歳」になっているんですけども、年中肝心な物の不足する暮らしをしているものですから、なかなか思うに任せません。でも、今日は出て来られて嬉しく思っています。

私は昭和二十年の六月十九日に福岡での空襲体験がありまして、それを最近は小学校とか九条の会などで六月になると空襲の語り部をしています。その空襲のことを書いたので今度の『三一〇人詩集』に参加させていただいて、立派なアンソロジーに参加できて本当にありがとうございました。その作品と、もう一つ方言詩を書いているものですからそれを読ませていただきます。

火災忌

空襲の炎に追われた昭和二十年六月十九日夜
わたしは国民学校四年生だった
低空飛行のB29の胴体が吐き出す焼夷弾は

連なり 流れ 飛び 落下し 火を噴く
人の住む街に 人の暮らしに 人の命の上に

灯火管制 防火用水 砂袋 鳶口 火叩き
小国民の銃後の守りを嘲る空からの火の手に
防空壕を這い出し 風下へ逃げる 走る
怒鳴り声 叫び声 泣き声 悲鳴
家族にはぐれ 群衆の後を火の粉に塗れ
引き潮の樋井川下流の橋の下になだれこむ

赤爛れた空からの轟音はきりもなく
油脂焼夷弾は川の面をめらめらと這い舐め
悪魔の翼に追われた人群れの修羅のざわめき
「南無妙法蓮華經」
「黙らんか非国民！」
「助けてつかあさい」
「畜生！馬鹿ったれ」
年寄りが喚く 赤ん坊が泣く 女が嘔う
人の恐怖が橋の下を埋め やがて静もる

いつものように陽は上り晴れた夜明け
町並みの燻る臭気の中を家へと走った
けれど わたしの家は無かった
辺り一面見通しのよくなった瓦礫の原
天に刺さった風呂屋の煙突一本

黒焦げの丸太になったK子ちゃんのお母さん
ぼろ雑巾のように火傷をした隣のお婆ちゃん
爆風にやられて祖父の耳は聴こえない

五十五年間生き延びてきた無傷のわたし
振り向けば後ろに煤けた炎の道
忘れないで 忘れないで と
悲痛に歪んだ人影が走ってくる
あの日から失うものは もう何もない
消えてしまった故郷は戻らず 人は帰らず
わたしの戦後は終わらない
わたしの二十世紀は終わらない

（同詩集398頁）

私は、詩を書き始めましたのは三十代の後半という大変遅い出発ですが、書き始めの頃から共通語と一緒に方言詩を書いてきたのです。それで、私の方言詩は、結婚して連れ合いの母、私の姑ですけどその義母と一緒に暮らして義母の話す大分弁、竹田地方の言葉ですが、それが面白かったものですから口真似をして覚えることから始まったのですが、未だに大分弁を話すことができないんです。それで私の場合は、生活語詩というのは書き言葉の方言ということになります。その作品をひとつ読ませていただきます。（『大空襲詩集』には無いのですが、聴いていただけたらありがたいです。

私は子供の頃に叔父と暮らしていまして、その若い叔父が中国の方に出征していて戦後に復員し

てきたのですが、戦争の傷を心に深く負ったままほんとうに幸せ薄い生涯を送ったのです。その叔父のことを書いたものを読ませていただきます。

生還したけんど

戦前の小叔父ちゃんは
オルガンを弾いたり美しい絵を描いたり
いさぎい優しい若い衆じゃった

小叔父ちゃんに赤紙の来たんは
高等学校卒業の春んこと
前の年に大叔父ちゃんも出征しちよっち
祖父も祖母も外面はしゃとしち
日の丸降っち見送ったけんど
家じゃ ずつねえことじゃあち
お国のために死んだりしちやいけん
頼むきい還っち来ちくりいち涙しよった

小叔父ちゃんが行った先たん戦地から
枯葉色の風景をスケッチしち葉書をくれた
辺りいちめん荒涼としち 寒い景色じゃった
いつでん「元気です」ち一言書いちよった
「憲兵になりました」ち一行の知らせもきた
やんがち そげん絵葉書の来んことなっち
昭和二十年八月十五日 日本は戦に負けた

空襲に遭うち何も無え焼け跡に
内地に居った大叔父ちゃんが復員しち
昭和二十一年には小叔父ちゃんも
中国から還っちきた
色の浅黒い逞しい男衆になっちよっち
リュックにいつペーこっペーの
毛布や軍服や外套やら毛糸の下着や靴まんで
大けな荷物を背負うち戻っちきたんじゃ

祖父も祖母もとうてん喜んで
焼け跡に掘っ立て小屋を建てち
せちい生活も希望だけは明るう灯しちよった

けんど小叔父ちゃんは以前とは違うごたる
人間になっち いつでんぼやとしちよっち
つくねんとよだきい様子じゃった

働き先も続かん
家にもおりおうておれん
とっとひょろくだまになっち
三十になってん 四十になってん
嫁ごも貰わんじゃった
息子の消息を案じて気に病んじよった

祖父の最期ん際にも間に合わん
何処やら彼処やら放浪のあげくんさんばち
大阪のドヤ街で死んでしもうたんじゃ
独りもののまんま 五十三歳じゃった

生きるか死ぬるかの戦場で何があったんか
どげえして復員してきたんか
とうとう何一つ言わんずく
あっちどりさい持ち去んだんじゃ

今年三十三回忌をしたんじゃけんど
口に出すとむげねえせちいことん丈で
誰あれも小叔父ちゃんの話はせん
あん時代を通り過ぎちきた年寄り
胸ん内になまかたは戦の傷負うちよっち
死ぬるまで言われんことも有るんじゃなあ

港敦子 続きまして浅見洋子様、よろしくお願いします。浅見さんは、お兄様が空襲のトラウマでアルコール中毒になり若くして亡くなってしまったそうです。そのことを書かれた詩集『マサヒロ兄さん』があります。あと、家族の空襲体験の詩「三月十日 三ノ輪の町で」がございます。

③ 浅見洋子

朗読の前に、少しこちらにある絵についてお話しさせていただきます。先ほど原田弁護士から東京大空襲訴訟の話があったかと思いますが、その原田から原告団の方の様々な生き方等を聞いた「ともだち」、そして私の「三月十日 三ノ輪の町で」という詩を読んできた私の親友が、後日一冊の絵本を持って来て下さいました。その絵本に描かれていた絵がございます。それをこのように大きく引き伸ばして、こういった朗読をさせていただける折に紹介させていただいております。今日読ませていただきますのは「三月十日 三ノ輪の町で」ではなくて、それこそ東京大空襲訴訟原告団として初めて声を上げたその方のスケッチを読ませていただきます。

独りぼっちの人生

—私は 今でも 夕陽が きらいです

語気を強め 言い切る 石田千絵子 六十九歳
東京大空襲訴訟で 証人尋問にたつ 彼女
打合せ場所を わが家にした 代理人の夫
二人の 傍らで 茶を入れながら
わたしは 彼女の話に 聞き入った

三月一日 六歳の誕生日をむかえた 千絵子は
深川で 三月十日の 東京大空襲にみまわれ
両親と 二人の兄弟を 亡くしたと 言う

あの日 十二歳の姉に 背負われ
千絵子が 目にした 光景は
焼けて小さくなった 黒い死体が
道いっぱい 折り重なり
人が歩ける分だけ 脇にどけられていた

まさに 地獄だったと 言う

十二歳の長女と十歳の長兄 千絵子が生き残った
翌日 三人は 別々の親戚に 引き取られた
その日から 千絵子の孤独との戦いが始まった

六歳の千絵子は 労働力には ならない
役にたたない 彼女の 食事は
芋一個か 一握りの ご飯だけ
みそ汁の味も お新香の味も 知らない

家に 居場所を持てない 千絵子は
夕日に 向かい
お父ちゃん！ お母ちゃん！
独り 泣き叫んでいたと言う
土手の 夕日が 沈むころ
そっと帰り 部屋の隅に
隠れるように 座っていたと 語る

小学校に入り 姉の居場所が 知らされた
学校に必要な一切を 姉から 貰うためにだ
小学校を出た 姉は すでに 女中奉公で
給金を貰い 食べることもできていた

長く延びた 黒い影が 田畑にとけこみ
夕日の落ちた 畦道を
千絵子は 姉の所に 行かなくてとはと
心細さに ふるえ 涙をこらえ
一心に 歩いたものだと 話した

明るい時間に 姉の所に着くと 家に返されるので
夕日を背に 暗くなってから 辿りつくようと
子どもなりの 知恵だったと 苦笑する
六十三年経った いまも 夕日は 千絵子を
幼い日の 不安で寂しかった日々にと 引き戻す

やせ細りお腹が膨らんだ 小学校三年の 千絵子
見かねた 近所の人々が 子守の世話をしてくれた
子守先の家で 初めて 家族と同じ 食事をした彼女
喜びと安堵の中 生きねばならないことを受け入れた

二十四歳 三度の転校後 夜間中学校を卒業
取得した和文タイプの資格をもち 就職活動を
が 面接で 高校も出ていない者に
タイプを打てるはずかないと 資格を否定された
彼女は 迷わず 夜間高校に進んだ
両親や保証人のいない 彼女につきまとった差別

三十四歳になった 千絵子に 縁談話きた

二歳になった男の子を 残し
妻に先だたれた男との 縁談だった
黄色くすんだ顔 手足の垢は 痂になっていた
彼女は 幼い日の自分を 重ね見た
私の命を この子にあげようと
この男を 慈しみ育てる 母の道を 選んだ

出された茶には 手をつけず 淡々と話す彼女
五十三歳で蜘蛛膜下出血し 後遺症があるそうだ
閉ざしていた 心の扉を開き 語り出した彼女
六歳で止まった 壊されたままの 心の時計
不安と恐怖と怒り 家族を慕う 狂おしい孤独

わたしは 涙を押しかくし
新しい茶を 入れかえながら
彼女の心の 癒される日が来ることを
千絵子さんの怒りが 解かれる日を 願った
(同詩集165頁)

港敦子 ありがとうございました。

次は北村愛子様、よろしくお願いします。北村さんは横浜大空襲の体験者で、多くの学友が焼け死んでいく場面に遭遇したことを詩集『証言 横浜大空襲』に書き記されました。

④ 北村愛子

最初に詩の朗読をさせていただきます。

横浜大空襲

——一九四五年五月二九日——

焼夷弾が 空から
黒いかたまりとなって落ちて来た
あとから あとから ポンボンと落ちて来た
炸裂した
パツと明るくなった
家に火がついた
狂ったように燃えはじめた
炎は たちまち轟音をあげた
防空壕の隙間から
煙がもうもうと入ってきた
「もう駄目だ 逃げよう！」
母の声に
ころげるように防空壕を出た
あっちからも こっちからも
逃げまどう人・人・人・・・
火のない方へと
まっくらな中を走った
ときどき火の手で
パァーツと明るくなる

「自分の背中に火がついているのに

わからねえのか！」

私は急に突き飛ばされた

衣類で 激しく背中を叩かれた

知らないおじさんだ

わたしの心臓はとまりそうになった

びっくりして声もでなかった

どこをどう歩いたのか記憶がない

わたしも母も 人波に押し流されていた

今ではおじさんの顔も思い出せない

国防色 巻脚絆

それしか思い出せない

お礼も言わなかった

早朝に空襲をうけたというのに

わたしは太陽を見なかった

その日はまっくらであった

世界は真っ暗であった

* この日、B29、517機、P51、101機が大型焼夷弾22224 個、小型焼夷弾41596
8個を投下した。

(同詩集210頁)

亡骸を焼く

防空壕の入口を直撃されて

出ることのできなかった姉弟

火焰においつめられ

五歳の弟をかばって

うつぶせに倒れた八歳の少女は

背中を真っ黒焦げに

炭化させて死んだ

松本ゆみ子

老松国民学校三年一組

わたしの同級生

わたしはあなたのお母さんと

ガレキの山の焼跡にいる

炭化した柱を集めて

あなたと勇くんの亡骸をお骨にするために

あなたのお母さんは

炭だらけの頬に

ぐしょぐしょ 黒い涙をながしながら

焼木杭の井桁をくんで

火をつけた

ぼうぼう音をたてて

焼木杭は燃えていく
ゆみ子ちゃんの炭化しなかった白い腹から
油がじゅくじゅく流れだした

人間の燃える臭いにおいが
鼻をつく
こんなむごいことは
これっきりでいい

松本ゆみ子ちゃんと勇くんの
亡骸は焼かれた
一九四五年五月三十一日
横浜市中区宮川町の焼跡
(同詩集211頁)

私の母は十歳の時に関東大震災に、三十二歳の時に横浜大空襲の大災害に遭いました。関東大震災の時には、母の四歳年上の兄が行方不明で帰って来ませんでした。

「災害の時にはどんなに熱くても川に入ってはいけないよ。溺れて死ぬか、両岸から炎が舌なめずりして焼き殺されるからね」

と母は言うのです。八歳の私は国民学校三年生でしたが、中耳炎の手術をしたばかりで学童疎開に行かれました。亡くなった同級生のゆみ子ちゃんは学童疎開で病気になり、空襲の前日に家に帰されたばかりでした。「死ぬために帰って来たようなものだ…」と、お母さんは泣き崩れるのです。

空襲の日は朝六時に起きました。その時、確かに太陽は昇り、晴れた朝でした。朝の九時十五分から十時十五分まで焼夷弾が落とされると、炎は燃え上がり明るくなりましたが、炎の無い方へ逃げていく私達には夜のように真っ暗でした。空を煙が覆い尽くしたので、太陽が隠されてしまったからだと思います。「樹木が炎を防いでくれるから山に逃げよう！」と母は私の手を引っ張って野毛山に逃げました。火が収まってから焼け跡に行くと、見渡す限り焼け野原で、焼けぼっくりが立っているだけでした。助かった人達は顔や衣服を煤だらけにして呆然と立っていました。家の近くの大岡川は、死体が山となって川下の方に流れて行きました。

皆さん、土左衛門がどのように流れて行くかご存知ですか？ 女は上向きに、男は下向きに、まるでゴム手袋のように膨れあがって白くふやけて流れて行くのです。私の瞼には六十四年経った今も、その時の光景が焼き付けられたままなのです。今もイラクやアフガニスタンで爆撃に遭って苦しんでいる子ども達や民衆のことを思うと、胸が塞がります。戦争体験者の私達は歳をとってやがて死んでいくでしょう。でも、子どもや孫達のために平和を築いていきたい、憲法九条を守っていきたい、日本がその要となるように努力したい、と思わずにはられません。

私は『大空襲三一〇人詩集』の出版を心から喜んでおります。この詩集の中には貴重な体験がリアルに表現されていて、心を打つものが沢山ありました。一人でも多くの人に読んでいただきたいと思います。

港敦子 どうもありがとうございました。

続いて斎藤彰吾さん、よろしくお願いします。斎藤さんは、戦争責任を問う詩篇の評論を書き続けていらしゃいます。岩手の方言詩の名手でもあります。

⑤ 斎藤彰吾

先ほどのスピーチで黒羽英二さんの「空襲なんぞ恐るべき」は国民歌謡だったかな？ 大変心に染みました。

私は先ず、この詩集の中に収められております宮静枝さんの「キシボ(鬼子母)」という作品を読み

宮さんについては、先ほだスピーチで森三紗さんが詳しくお話しさいましたけれども、私共高校の時でしたか県の詩の集まりで、ゾロゾロ三、四人で盛岡の詩の大会に行行って賞状をいっぱい貰って来たこともあります。そうしたら宮静枝さんは、ある地域の少年達がみんな賞をさらって行ったというようなことを書いてくれたこともございました。宮さんは私のお母さんというか姉さんといいますか、詩のお母さんとして僕達のことを大変指導されて下さいました。

機影が去ったあと

ほら メガフォンをさげた

消防団に橋から怒鳴られたっけ

川面からふきあがった

でかい水しぶきの

スローモーションが

今でも

素ッ頓狂な目玉に

かぶさってくる

魔法の傘のような物が

機銃掃射をあびたら

たのしい日曜日が

たちまち 真ッ黒になったろう

誰かが傷だらけになり死んだろう

爆弾がぼくらの近くに落ちたら

消防団がかけつけたところで

もはや ぼくらは

美しいこの世から いなくなり

神田神保町の古本屋にも 行けないのだ

※

同じ夏の日

広島本川の土手ぞいに

並んでいた広島二中の一年生三百二十二名。

「一、二、三、四……」

元気な点呼が終った時

見上げた あお空に

B29の銀翼、キラリと三機。

「敵機、敵機」の声に「休メ」の号令。

ドラム缶のような黒い爆弾が一番機から

つづいてパラシュートが落下

ぼくらの頭上五百七十^{メートル}の高さで爆発した。

オレンジの閃光 空が壊れるほどの大音響に

目が焼かれ たたきつけられ

吹き飛ばされ 白いけむりにおおわれた。

川を影が赤黒く流れて

包帯姿でよれよれたどり着いた友もいたが

百六十名は遺体すら見つからなかった。

残された親たちは

かぶさってくるキノコ雲の下

うつろな歳月の窓辺で

“死んだ兎の齡”をくり返し数えたという

君よ

君らは どうだったのか。

ツユキ君は慶應大学を出て紙の会社に

キタジマ君は新聞記者

ぼくは 小さな町の図書館員
泣いたり 笑ったり
ときどき 出ハてくる突ツ返えを
目をシロクロさせて 吐きだし吐きだし
生き延びてきたけど……
ぼくらは今も ゲートルを首まで巻いている。

* 広島テレビ放送編「いしぶみ」(一九七一年ポプラ社刊)を参考。

(同詩集234頁を一部改作)

港敦子 斎藤さん、ありがとうございました。

次は尾内達也さんです。よろしくお願いします。三月三日にNHKラジオで早乙女さんが今から読まれます尾内さんの詩を朗読されました。「詩人が歌うにも歌えない現実」に迫っている作品だと深く評価されています。

⑥ 尾内達也

初めに少しお話しさせていただきたいのですが、空爆詩集を全部ではないのですが読ませていただいて私が感じたのは、これは明らかに大量殺戮だと思いました。

大量殺戮というのは、別の面から考えますと人間の権利が全く崩壊してしまったという状況ではなからうかと言えるかと思います。「倫理」というふうに辛気臭いものではなく、「人を殺すなかれ」という最も基本的なことが大量な形で破られてしまった。

考えてみますに、倫理といっても社会的な基盤というのがあるはずで。どうということかと申しますと、例えば顔見知りの人達、よく知っている人達の間で知人を殺すということはなかなかできないだろうと思うわけです。

では、どういう状況になったら人は人を殺すことができるのか—それは、一つには人と人との距離が離れた時。例えば、人が物のように現れてしまっている時だろうと思います。知り合いの友達ではなく、その人が全く物のような形でその人の前に現れた時。どうということかと申しますと、湾岸戦争の時にハイテク機器で、テレビ画面に映った映像を皆さんは覚えておられると思いますが、まるでテレビゲームのように爆弾を落としていく。ピンポイントで爆弾を落としていく。そこには全く人の顔というのは無いわけですね。人と人との距離が全く離れてしまっている。

これを一般的に少し考えてみますと、ある意味では科学技術というものが人間と人間の距離を引き離してしまっているのではなからうかと思います。身近な例で言えばインターネットというのがありますけれども、インターネットは、二十四時間世界の人達と連絡が取れるということで非常に世界を小さくしたわけですが、反面、全然顔見知りでない人達の間でもコミュニケーションが可能だ。例えば電子掲示板のようなものを見ていると、そこにはモラルとか倫理というのは成立しにくいわけですよ。なぜかと言えば、顔を見なくても済むからです。実際に会わなくても済むから。そういう機械、科学技術が媒介することによって人間の倫理が崩れていく側面があるのではなからうかという。それが大規模な形で起きたのが“大空襲”だったのではなからうか、ある意味ではそういうふうに言えるのではないかと、ちょっと読みながら思ったのですが。

そういう意味で、人間とは確かに酷いもの—かも知れませんが、そうなる条件というものがある。どういう時に人間がけだものになってしまうのか？ それは一つは、科学技術というもののマイナス面と非常に関係があるのではないかと、ということを考えた方が、こういう問題が現に今起きていて今後も起きるであろうと思われるわけですが、そういう問題を考えていく上で焦点が絞られるのではなからうかと僕は思いました。

そのようなことを思って、現代の空爆について詩を朗読させていただきます。

ここにはその詩はない
だから これは詩ではない
その詩はどこにあるのか
突き刺さるものの中にか
あふれ出るものの中にか
かっと見開いたものの中にか

ここにはその詩はない

女のまなざし
座り込んだ背中
散らばったサンダル
天のしづけさ

わたしは笑うことも
歌うことも
悲しむことも
怒ることもできない

夜の雪はめまいであり
冬の銀河は耳鳴りである

港敦子 ありがとうございます。

続きまして結城文さん、よろしくお願いします。結城さんは松山空襲の体験者でいらっしゃいます。その時の体験を詩「記憶」に書き記しました。『原爆詩一八一人集』の英語版の翻訳者のお一人でいらっしゃいます。

⑦ 結城文

今ご紹介いただきましたように、『原爆詩一八一人集』の訳者の一人にさせていただきました。そしてもう一つ原爆の短歌、長崎で被爆された竹山広さんという方が今八十九歳くらいでまだご存命なのですが、その方が二十五歳で長崎で被爆された『とこしえの川』という第一歌集から百首選びまして、それも英訳させていただきました。

原爆をなぜ英訳するかと言えば、やはり日本が唯一の被爆国であるからということで、それは日本だけでいろいろこういう会をやったり、それから本を出版したりそれを語り伝えていくだけでなく、やはりその悲劇を世界のものにしていかなければいけない。それが唯一の被爆国である日本人としてのやるべき仕事ではないかと思います。他の訳者の方も、それからそういう企画をされた方達のお気持ちも、そうだったと思います。

原爆は日本の特殊のものなのですが、“空襲”ということは第二次世界大戦でもう全世界的に共通のものです。それで、ピカソの絵でゲルニカの空襲が有名になり、ディラン・トマスという人の詩でロンドンの空襲が有名になりました。トマスの詩では少女とかあるいは老人（非戦闘員）が空襲で亡くなったりする、それが描写されています。日本の空襲についてこうして本当に体系的な一書が出たということは、私は本当に『原爆詩一八一人集』に並ぶ二つが双璧になるような、戦争に対する立派なお仕事だったと思います。

第一次世界大戦というのがありまして、その時と第二次世界大戦というのを比べてみますと、第一次世界大戦というのは一九一四年から一八年まで。それはドイツ、オーストリアそれからイタリアに対してフランス、イギリスそれからロシア、後にアメリカや日本も加わってくるのですが、その戦争と、それから約二十年後に起こりました第二次世界大戦（一九四〇年～四五年）とは、戦争の様式が全く違う様相を呈しているのです。第一次大戦というのは歴史上一番戦死者の多く出た戦争と言われています。それで、seventeen millionという向こうの統計ですが、七百万の戦死者が出た。でも、その死者の内容は皆戦闘員です。兵士です。それに対して第二次世界大戦の死者はどれくらい出たかという統計的なものは知りませんが、非戦闘員の死者が非常に多くなっている。なぜ非戦闘員が死んだかといえば、それは空襲。第一次世界大戦の時には兵器は機関銃とか大砲とか毒ガスですよね。両方の陣営は壕を掘って、鉄条網を廻らして待機しているという持久戦。それで毒ガスというのが使われて、それが非常に非人道的な兵器であるということで禁止されるということになりますけれども、第二次世界大戦の時にはもう航空機が発達しているから、敵に損害を与えるのに非常に有効な、B29で来て高い所から落としていれば自分の方の被害は殆ど無くて相手を完全に殺傷でき

る、破壊できるという戦争でしたね。その最たるものが原爆。たった三機の飛行機が広島全土を破壊したということだと思うのです。だから、この“空襲”ということがどういう意味を持っていたかというのは、やはり私達はもう一回考え直してそれを伝えなければいけないと思います。

皆さん痛切な空襲体験をお持ちでしたけれども、サイパン島が落ちた時に私は小学校の低学年でしたから、疎開をしました。疎開をしたのが母方の祖母の故郷である四国の松山市。道後温泉の近くで、道後小学校に通いました。祖父母と母の妹はまだ東京に残ってしまして杉並区高円寺にいます、五月二十五日の空襲で焼け出されて私達と一緒にになりました。一ヵ月か少し経った頃、昭和二十年の七月二十六日に松山空襲を祖父母や私達が共に体験をする。私は小さい時の記憶だったので、松山自身があまりやられなかったのですが、豊後水道をB29の編隊が北九州あるいは京阪神に爆撃に行く時のいつも通り道になる。空襲警報というのはしょっちゅう発令されて、私の住んでいた所は道後小学校の間の道が国道が通ってしまして、家が無い部分があって両側が田圃なんです。そうすると機銃掃射というのが一番怖くて、敵機が低くなって機銃掃射を受けたら身を隠す場所も無いような、そんな恐怖が一番ありました。

その後私達はうまく生き延びて終戦後—所沢飛行場というのが戦争中にあって、戦後はJohnson Air Baseと接收され、今はまた返されて自衛隊の入間基地というのだと思います—その近くに住んでいます。普段はあまり感じないのですが、航空機ショーが一年に一回ありまして、その前になると飛行機がショーの練習をするんです。そのコースにどうもなっているらしくて、ちょっと怖い体験をしたことがあった。それで詩を書きました。

いつもの空

編隊をくんだ三機の自衛隊機が
音もなく急降下し
私をめがけてみるみる近づく
黒い恐怖に凍りつく一秒 二秒 三秒……
三角形の編隊をくんだ黒い機影は
視野よりたちまち消えて
直後 頭の上をおおった戦闘機の轟音

爆音によりがえる
—昭和二十年七月二十六日 松山—

いつものように空襲警報のサイレンが鳴った
と同時に いきなり
ヒュルヒュル バリバリ ヒュルヒュル
得体の知れない音
祖母の声に階下の八畳の押入れに逃げ込む
東京で焼け出された祖母はいう
「焼夷弾攻撃だから防空壕にはいってはおだめ
蒸し焼きになってしまう」
敵機はまるで家の真上にいるよう
何千という雷が暴れているような炸裂音が
閃光がどのくらい続いたろうか—
家の背後の御幸寺山が燃えている
いつの間にか黒い牛が二、三頭
田んぼの杭につながれてモーモーと首をふっている
田植えのすんだ水張田の水が 稲が燃えている
担架がきた

集団登校の班長が出血している箇所に
モグサをあてられ三角巾でしばってはこばれていった
練兵場の向こう
大街道のあたりが真っ赤だ
盆地を囲む山々を焼き
中心にある城山を焼き
街に縦横十文字に焼夷弾をおとしたと
大人たちはいいあっていた……

だしぬけに急降下した自衛隊戦闘機の
機影も轟音も去ったガラス窓のなかには
四角く切りとられて
いつもの静かな空がある

(同詩集357頁)

港敦子 結城さん、ありがとうございました。

続きまして塚越祐佳さんです。塚越さんはアメリカに留学をしていたことがあるそうで、その時に9・11のテロが起こったそうです。その悲劇を詩に託しました。よろしくお願いします。

⑧ 塚越祐佳

私は、二〇〇一年からアメリカ文学と詩と物語の創作を勉強するためにニューヨークの大学に三年くらい留学していました。ちょうど二〇〇一年ということで、マンハッタンのワールド・トレード・センターで起きた9・11同時多発テロの時にニューヨーク州に滞在していました。マンハッタンより少し離れた大学にいたのですが、その9・11テロの起きる三日前にたまたまマンハッタンのワールド・トレード・センターを訪れていまして、今でも訪れた時にそこで見た普通に働いていた方々は無事だったのかな？ どうしたのかな？ 大丈夫なのかな？ というのは考えて、ちょっと胸が苦しくなります。テロの起きたグラウンド・ゼロを一年後に訪れたのですが、その時にはもう全てのビルの破片とか残骸がきれいに片付けられていて、きれいな空き地になっていて、まるでここで何も起こらなかったのではないかとというくらいきれいさっぱり片付けられていて、何かとても複雑な悲しい気持ちになりました。

その時に思ったのが、上手く言えないのですが「人は自分の受けた痛みではない痛みについてはかなり速い速度で忘れてしまうものなのかも知れない」ということで、それはとても悲しいことなのですが、やはり忘れてはならない、心を空き地にしてはいけない、他人の痛みも自分の痛みも同じように忘れてはいけないことだ、と思って今回この詩を書かせていただきました。朗読させていただきます。

裏 庭

マンハッタンのおおきな家
いまではわたしの

それはいま骨の中に入っています
ざわざわして小部屋がいっぱい
たくさんの戦後
わたしはケエキにくつつこおりのように
かいだんの数だけさやうにゆられていく

病数

かぞえる老婆ねむりにつくまで

もらった小ゆびはふとんのなかであたためていて

(かわいた材木にもとどおり)
いつのまにか屋根のように丸くもりあがった
ふとんをわたしはめくることができなくて
木々が骨の中をすべすべにしてい
電話は老婆の横で鳴り続けていて(とってあげない)

空き地を見てよろこぶ人々の
耳と目と齒
窓のようにもうすぐ
黄いろく
とじる
だからミス・ポーン
リバティ通りぞいの
あなたの立派な裏庭なら
小ゆびを育てられます
やがて木になってつちに会おう
鳩がみえないわたしのかわりに
あの九月にエレベーター前で勤務していた
前歯のない警備員のかわりに
空のことは昨日わすれましたから

もうすでにビョーキはなおっているのに
数えつづける老婆
さかさまにして
味もおいも音もする

なつかしい場所
だけどわたしはそこに行ったことがない
(同詩集472頁)

港敦子 ありがとうございます。

続きまして秋山泰則さん、よろしく願います。秋山さんをご紹介します。お母様と一緒に東京大空襲を経験されました。火の壁を突破して九死に一生を得たと聞きます。疎開して松本に暮らし、松本市議を長く務めました。現在は美ヶ原高原での詩祭を毎年続けていらっやいます。

⑨ 秋山泰則

長野県の松本市からやってまいりました。何人かの方には今ご紹介いただきました「美ヶ原高原詩人祭」というもののご案内をさせていただいております。詩を展示して、それから、時々人が集まった時に希望があれば高山植物の咲いている道端で詩の朗読会をするという、たったそれだけの企画ですが、お陰様で今年で六回目を迎えることができました。どうぞご参加をよろしく願ひ致します。

この『大空襲三一〇人詩集』というのは、私の住んでいる小さな町でもちょっとした波紋を広げております。何人かが購読の希望がありました。その中に本屋さんからの照会もありましたので、コールサックさんの方を紹介したというような例もあります。それから、詩集を読んだということで詩集の朗読会を、私が耳にしているのでは七月二十二日と八月五日、それから八月中に二件ほどありまして、現在のところ四件くらいがこの詩集を読むということで会合を持っているそうです。七月二十二日の方は六十人ほどがもう既に参加の申込みがあるそうして、「語り部」ということをその方はおっしゃっていましたが、そういうことをなさっている方が読むと聞いております。それから八月初旬の方も、これもやはり現在のところ六十名少しの人が参加を希望していると聞いておりますので、私からする

と意外だなと思っております。

時間がだいぶ迫っているようですので、私の詩を朗読させていただきます。

百キロ爆弾のそばで

百キロ爆弾が開けた穴のそばで
炭になった人間がころがっているよ
お嫁さんとお婆さんという人がいたよ
誰のお嫁さんになろうとしていたのか
何であそこを歩いていたのか
若い人だったのかきれいな人だったのか
炭からは何もわからないよ
一人の方はお婆さんだというがそれもわからないよ
人の形をした炭はその辺りにいくつもいくつもあったし
同じものは毎日つくられていたよ
配給の列に並んだまま炭になった人
お米もお砂糖も何もいらなくなってしまった人が
大きな穴のそばで列をつくっているよ
背中であたりで
子供と溶け合っている炭もあるよ
両手をあげ顎をあげ体をいっぱいにのばしているよ
お腹を抱え屈んでいるよ
手で顔を覆っているよ
薬缶が炭にくっついているよ
男かもしれないよ
女かもしれないよ
泣いていたかもしれないよ

どの人も髪の毛は燃えてしまっているよ
眼鏡をかけていたかもしれないよ
優しい人も静かな人も
そうでない人もいたかもしれないよ
炭になった人は炭のままで
動こうとした形のままで止まっているよ
動いて何をしようと どこへ行こうと 何を言おうとしたの か
知ろうとしなければならないよ
口を開けたまま炭になってしまった人の
伝えたかった言葉を聴かなくてはならないよ
胸に深く指を食い込ませた炭が思っていたことを
考えなくてはならないよ
百キロ爆弾が向かって来るときは
鉄橋を車が通る音がするよ
鉄の塊が空気を破ってくる音だよ
町中が燃えると
火は素早く走りはじめるよ
川の水が燃えたよ
川は逃げてきた人を金色の火でつつみ 殺していったよ
川へ入らなかった人達は熱で溶けたよ

紙みたいに燃えて空へ上がったよ
融けなかった人は人間の形をした炭になったよ

燃えた空を川は映していたよ
きれいな赤い色で川が燃えて
生きたがっていた人間がみんな死んだよ
空が燃えた 水が燃えたんだよ
戦争の火は何でも燃やすんだよ
何でも溶かし溶けないものは炭にするんだよ
燃えなくても溶けなくても炭にならなくても
戦争の火を見た人間は死ぬんだよ

戦争なんだ

爆撃のあとは雨が降るんだよ
水が飲みたくて水を探して水が飲めなかった人に
雨は降ってくれるんだよ
大きな穴に水が溜まっているよ
粉々になって埋まっている人の上に
雨が溜まっていくよ
炭になった人から 炭にしたものから湯気が出て
静かになっていくよ
動こうとしているのは生きている人だよ
動けない人ばかりだよ
もういいよ
もういいよもういいよ
もういいよ
もういいよ

もういいよ
もういいよ
もういいよ

(同詩集126頁)

港敦子 ありがとうございます。

続きましてくにさきみさんです。よろしく願います。今日は岡山からいらっしやっていただきました。幼少の頃より社会的テーマの詩を書き続けていらっしやいます。最新詩集『国家の成分』は、国家に翻弄される民衆の悲劇を抉り出し、国家の在り方を問うていらっしやいます。

⑩ くにさきみ

岡山県の総社市からまいりました。この大切な時間を、五分やるから遠くから来るのだから何かしゃべるようにと書いていただいたのですが、実はこんな所で話をさせていただいて良いのだろうかというのが、今私が非常に責められてずっと考え続けています。

私は戦争世代を生きてまいりましたけれども、なにぶん岡山県は田舎ですし総社市という所は農村で、戦災の記憶というのが切実ではございません。今日皆さんからいろいろなお話を聞いて、本当に戦争ってこういうものなんだなと思いましたけれど、実は私の体験した戦争というのは、最初は水島の航空機製作所、今は自動車を作っておりますが、ここへ六機編隊くらいでB29が飛んで来ます。女学校の二年生でした。これを見ながら実は、防空頭巾を背中に掛けて何だか早く学校を

返してもらって嬉しかったんですよ。「ああ、今日は家へ帰れる！」って喜んで帰っている途中、もうザアアーと機が来て爆弾を落として行くんです。爆弾というのは、私は真っ直ぐ落ちてくるのかと思っていたんですよ。ところが、放物線を描いてスー、スーっと、とてもきれいに落ちてきます。私は、そこでどんなに大勢の人が殺されたり阿鼻叫喚があるかということよりも、「ヘー、爆弾ってあんなふうに放物線を描く。きれい！」と思ってしまったんですよ。こんなお話を体験者の前でする時、非常にご立腹かと思いますが、それが第一回でした。

二回目は岡山空襲でした。六月二十九日です。この時は深夜です。一時頃から二時頃の間に空襲がありましたが、私の家はちょうど山に囲まれていてその山を抜けないと空襲の状況が見られないので、「どうも岡山が燃えとるような」と言うので急いで駆けつけてみました。備中国分寺が非常に黒いシルエットで小さくきれいに見えて、空全体が真っ赤なんです。真っ赤というよりピンク色です。田植えの直後でしたから水田もまたそれを映して、パアーツと燃え上がるんです。パツパツと明るくなる時に、見ている人の頬が紅潮したように見えるんですよ。これが私の空襲体験でした。

三回目は福山市の空襲でした。これは八月八日ですが、縁側から西を見て「また何処か焼けている。笠岡だろうか、小山だろうか、尾道だろうか？」と言っているんですよ。さすがにその時は、これはどうなるんだろうと思いました。

実は、航空機製作所へきれいに爆弾が落ちた時に私は、どんなにデマが飛んでも、どんなに神風と言われても、戦争は負けているのだということを切実に感じました。戦争は負けているから。見たらわかる、というのがあるんですね。そういうことで実は、私は戦争を体験しない、言ってみれば資料を手探りながら、だから良い詩は書けませんけれども、それからずうっと反戦の詩といますか原爆の詩といますか戦争の詩を百二三十書き続けてまいりました。これはいくら書いてもそれを体験した人の傍へも寄れないどころではなくて、まるで嘘を書いているようなものだと思いつつ書いています。

なぜそういうふうになっているかということには幾つかの理由があります。実は私は、小さい時に貰われてきました。私の養父は職業軍人でした。日華事変の頃に四年間中国へ戦争に行きました。幸いに元気で戻ってきました、「良かったなあ」と家族中で言いました。でも彼は、その戦争の体験を死ぬまで何も話ませんでした。肺炎で死ぬ直前、大変苦しかったんだろうと思うのですが、「よいしょ、よいしょ、よいしょ」と私の手を捕まえて言うのです。母が、戦争へ行ってどこかの山へ登って大変苦しい闘いをしているのを夢に見ているんじゃないかと言いましたけれど。そうやって何も言わないで死んでいきました。もう一つ私は、最近になって思っていることがございます。それは、私の夫の一番上の兄で長男ですが、国定和夫と申します。この長男がフィリピンへ回されまして、レイテ島の作戦に参加しました。もう負け戦でどうにもならない戦争でしたけれど、そこで人肉を食べる経験を致しましたし、自分の仲良くしていた非常に優しい村で往き来があったのですが、最後にはその村へ火をかけて焼いて、その村の食糧を略奪して山へ逃げ込んだそうです。この話を八十六歳になるまで彼は致しませんでしたけれども、去年、意を決して深夜の放送をさせていただいたと言っております。

こういう話を聞きながら私はなぜ恥ずかしい話ばかりするかと言いますと、戦争をやっている時は加害者ばかり。戦争をやって「進め、進め」と忙しい話ばかりで、戦争に負けたら被害者ばかり。加害の話というのは本当に出て来ないんです。でも私は、自分が半分以上加害者だという気持ちがございます。これはもう戦争をやっている国、勝とうと負けようと加害者であり被害者だという気がしておりますけれども、加害の詩はなかなか書かれません。今これだけ切実な問題が訴えられておりますけれども、(以下強調して)本当の戦争の問題がまだまだ書かれていないのではないかという気がしています。私はなかなか兄のその体験を書けないで今迷っておりますけれども、いつか書かなければならないと思っています。

—こんな貧しい話しかできませんでしたが、皆さんの詩を本当に心から受け止めさせていただきました。ありがとうございました。

港敦子 ありがとうございました。

続きまして京都からいらっしゃって下さいました名古屋よえさん、よろしくお願い致します。名古屋

は京都市生まれで、疎開先の空襲で亡くなったあゆみ先生の悲劇を詩「疎開児童と不発弾」で記されました。

⑪ 名古きよえ

私は『大空襲三一〇人詩集』の素晴らしい大きなお仕事をされたことに接しまして、本当に感動しました。それで、出版記念会には是非寄せていただきたいと思って、出席させていただきました。ありがとうございます。少し自分を振り返りましてメモしてきたことを読ませていただきます。

私は京都の北部の山村で生まれましたが、小学校へ上がる頃から戦争のために精神的にも生活面でもいろいろと影響を受けました。十歳の時に敗戦になり、その時のショックで深く反戦・平和の気持ちになりました。第一に、戦争が始まったら取り返しがつかない。次に、平和のために毎日努力しなくてはいけない。—この二つが私の底にあります。家庭で、勤めていた会社で、今は地域の活動や文学を通して、戦争の恐れや不安を表現したいと思ってきました。

私は個人的にですが、あの第二次世界大戦が終結して以来日本は一応平和であって本当に良かったと思います。母親として息子を育て、彼の息子も今年十六歳になりました。まだ若い青年ですが、彼にも反戦・平和の精神を身を以て教えてきたように思います。

平和は畑を作るようなものだと思います。放っておけば草はボウボウ、蔓も伸びて絡みつき、作物は養分を取られ、陽が当たらず、目的のものはできず、土地は荒れ放題になります。私は、東京、大阪、神戸、広島、長崎とその悲惨な状態を直に知りませんでしたが、戦争の悲劇は、大小や人数の問題もありますけれども、一人ひとりが深い傷を心に受け止め、世界に向かって反戦・平和のために働きかけることだと思います。

ある詩に

「雲に隠された刃を見抜く」

という一行が私の心に残っております。やはり、いつも未来のために、今何が起きているかをよく知り、もっともっと知恵を絞って大切なものを育てていきたいと思います。どうもありがとうございました。

港敦子 どうもありがとうございました。

以上で第二部が終了致します。続けて映像に入ります。

《第三部 大空襲・映像詩篇〈宗左近「炎える母」朗読〉他》

[DVD]約三十三分

[出演]宗左近、早乙女勝元、鳴海英吉、浜田知章、御庄博実

[協力]東京大空襲戦災資料センター、NHK、浜田知章全詩集刊行会、早乙女勝元、宗香、御庄博実、田上悦子、長津功三良

[企画編集]矢口龍汰、鈴木比佐雄

概要

映像はオムニバス形式で、〈宗左近による自作詩の朗読〉〈NHKTV放送番組「最後に綴ったヒロシマ」〉〈鳴海英吉による自作詩の朗読他〉〈浜田知章によるあいさつ〉〈宗左近による自作詩の朗読〉の六シーンにより構成。在りし日の宗左近、鳴海英吉、浜田知章の姿、肉声がよみがえる。

scene 1: 宗左近による自作詩の朗読。詩集『炎える母』より「走っている その夜14」全行（音声のみ）

scene 2: 二〇〇三年三月九日、東京・ティアラこうとうで開催された東京大空襲戦災資料センター主催による「語り継ぐ東京大空襲 いま考えること—開館一周年のつどい」。司会＝早乙女勝元、講演＝宗左近

scene 3: 鳴海英吉による小トークと自作詩の朗読映像。詩集『定本 ナホトカ集結地にて』より「虹」「土」「鬼」「パート4 さよなら」（一九九三年三月十三日収録）

scene 4: 二〇〇一年七月七日、広島で行われた「浜田知章全詩集出版記念会」における浜田知

章のあいさつ映像。

scene 5:『最後に綴ったヒロシマ～ある韓国人被爆者の遺言～』(ウィークエンドスペシャル、NHK、二〇〇二年一月二十六日放送)より一部映像。

scene 6:宗左近による自作詩の朗読。詩集『炎える母』より「サヨウナラよサヨウナラ サヨウナラよサヨウナラ3」全行(音声のみ)

《第四部 編者挨拶》

長津功三良 皆さん、こんにちは。始める前に、今の映像で出た医師丸屋博というのは、詩人御庄博実の本名でございます。李順基さんの韓国へ行って本人を励まして、最終原稿ができるところでそれを見届けた。最後は彼が筆記をして現地へ持って行って、本人の死ぬ直前に原稿の出来上がりを見せて本にしました。本当に三月くらいかかってそれをやったようでございます。

本当に今日はありがとうございました。この「大空襲」というのは、鈴木さんと山本さんと前に『原爆詩一八一人集』を作った時から「広島と長崎だけではないんだ、いろんな死を迎えた大変な目に遭っている所がたくさんある」と。もちろん先ほど加害の話も出ましたが、広島の人でもマレーシアなどへ行ってけっこういろいろやっているんですね。我々の先達の栗原貞子さんも詩「ヒロシマというとき」で広島ばかりではなく日本が被害者意識だけを強調したら誰も振り返ってくれないという詩を書いていますけど。そういう意味でも、全国的に空襲を受けたりいろんな死に直面していることを記録しなくてはいけないと考えました。初め私は、東京・横浜、名古屋、大阪・神戸とかでシリーズ化したらという考え方を実は持っていたのですが、鈴木さんの「いや、少し大きくなるけれども一手にやってしまった方が迫力もあるし、纏まったものとして皆さんに提示できるから」というご意見があって、それで、本当に彼が半年間献身的な努力をして皆さんに呼びかけてこういった本が出来ました。僕などは発案だけでそれほどのお手伝いをしてないので心苦しいのですが、とても良い本が出来たと思いますし、これからまた海外へもいろいろ紹介する機会があればいいと思いますし、皆さん一人が何冊でもいいですから是非広めていただけるようによろしくお願いいたしますと思います。今日は本当にありがとうございました。

山本十四尾 先ほど長野の秋山さんがこの大空襲詩集の中から鑑賞する会が開かれるようなことを話されましたけれども、栃木県の宇都宮で八月七～九日まで写真展(第二五回宇都宮空襲展)が開かれます。宇都宮空襲に遭った時の写真を県民から募集をしました。それが新聞の記事に載りまして、展示する時にこの『大空襲三一〇人詩集』が写真集の展示と同時に机の上にあつたらいいとその時に思ったのです。それで担当の人に電話をしましたら、「実はもう求めています」という形で回答がありまして、編者としては仕事はこれからだという認識を新たに致しました。秋山さんの方で開かれる『大空襲三一〇人詩集』の会合にも編者としては行かねばならないだろうと思っていますし、それから、宇都宮で開かれる写真展にこの本が置かれていますから、宇都宮から今度はどこの県、どこの市というような、点と点を結びつける役割を編者としてこれからやっていきたいと思っています。これは、『三一〇人詩集』の本を出した者として「戦争というものはもうするものじゃない」ということを一般の人達に知っていただくという、もう気の遠くなるような、ゆっくりと静かに浸透させていこうと思います。この思いはこれからも変わらないで進めていきたいと思うのです。

今回参加していただいた方達に心から感謝を申し上げて、編者としては仕事はこれからだということで認識して行動していきたいと思っています。今日はいろいろありがとうございました。

郡山 直 私は長いこともう六十年近く詩をずっと書いてまして、最近はもう飽きて、自分の詩を書くのも嫌で、また他人の作品を読むのもどうも億劫です。—そういう状態だったのです。ところが今日また皆さんのお話を聞いて、ちょっと心を新たにしました。

私は、今満二十八歳で(一同笑い)まあ元気なんですね。これからも元気で生きたいと思いますが、特に今日、大井さんとかいろいろな方々の朗読を聴きまして、特に私は門田さんの叔父さんについての方言の詩に非常に感動しました。戦争というものは人の体を殺すこともある、それから手足を

失くさせることもある。けれどもそれと同時に、身体的には損傷は無くても心をこんなにも痛めつけるのだと。本当に戦争というものは絶対やってはいけないものだと思います。

話はあちこち飛びますが、私はブッシュのイラク戦争、もうそれだけは許せないんです。彼が戦争を始める前に、準備して中東に兵隊を送るとか言った時に、私は腹が立ちましたね。ちょっと三十分くらい自転車で行けば新鮮な卵の買える養鶏所があるのですが、そこへ自転車に乗って行きながら「もうブッシュの奴、戦争せんにやいいが！」と思っていた。ところが三月二十日に始めて、その結果はどうなったか？ 今は治まったようで、今度はオバマ大統領が兵隊を引き揚げるという段階になって、またイラクで爆撃です。ああいうふうにはテロが起きている。

（語気を強めて）本当に、戦争を始めた奴は酷いと思う。ブッシュも酷いし、日本もパール・ハーバーを攻撃した。本当に戦争というものはやってはいかんと思います。それで、門田さんの詩とか大井さん、皆さんの詩を聴いて、「よし、もう一度、今度は反戦の詩を書こう！」と決心しました（会場より拍手）。私は、絶対許せん奴は許せないのです！ ブッシュは許せん！

私は九十ページくらい英語の詩を書いて、三月頃に纏めて『イラク戦争』という英詩集を出したんです。三百部刷りましたけれどもあまり売れませんが。まああまり売れる必要はないけれども、誰か中には読んでくれて、ギリシャの女の人に送ったら非常に褒めてきました。頑張れ、ということですね。それで、私はもう詩も飽きた、他の人の詩を読むのも嫌だと思っていましたが、今日ここで改めて何人かの方の詩を聴いて「よし、やるぞ！」と思っています。

私はずっとここ五十年ほど英語で書いていて、日本語では散文の詩、自由詩はほとんど書いてないのですが、もうブッシュの戦争が始まってからは英語で書くのはまどろっこしいんです。それで、日本語で短歌を書くことにしました。一晚に四十首くらい書いた。そうしたら、短歌を作る人に「それは多すぎるよ」と言って笑われましたけど（笑）。それでちょっと最近の、ここに来てもう少し推敲したのですが、ちょっと読ませていただきます。

人類が生き残る道ただひとつ戦と核兵器廃絶すること
黒こげの死体またいで逃げたのか大空襲の恐怖の夜に
忍ばずの池も空襲見てショック真っ赤に燃える東京の街

私は早乙女さんのことはいろいろな新聞などで読んでどんな人かと思っていて、今日早乙女さんに実際にお話を伺うことができて非常に嬉しく光栄に思います。

まあ皆さん、一つ頑張りましょう！

鈴木比佐雄 こういう本ができたということを本当に皆さんに感謝したいと思います。三百十名の方の本当に厚いご支援でできたことだと思います。

私がどうしてある意味で企画・発案の中の一人となって関わることができたかという、祖父母に東京大空襲の話聞いていたことがあります。東京大空襲資料センターに行って焼けた地図を見たのですが、ちょうど私が住んでいた南千住三丁目は半分焼けています。私の家は祖父母からは「家が半分焼けた」と聞いていましたから、まさにびっくりでした。そういう話を聞いたりとか、あと、浅草国際通りに死体がズラーツと並べられてそれが大変な情景だったとか、上野、浅草まで見えたとか、そんな話をしょっちゅう聞いていました。そういうこととか、あと、私は詩が好きで大学で哲学をやりながら詩を読んでいたのですが、その前に、高校時代に急に本を読み始めて早乙女さんの『東京大空襲 昭和20年3月10日の記録』という岩波新書や家永三郎の本なども読んで、七三一部隊とかそういうことを考え始めました。そこで「戦争責任」ということを考えていたことが根底にあったのです。そして法政大学に入ったら、宗左近さんとかいろんな詩人がいたんですね。宗さんの授業には出るチャンスはなかったのですが宗さんの詩はその頃から読んでいて、私の中で漠然と戦後詩の根幹になるのではないかなという漠然とした思いがありました。「コールサック」誌を一九八七年に始めた時に「列島」にも参加された父の世代の鳴海英吉さんを誘ったんですけどね、シベリヤ抑留の経験を生涯をかけて反復された方を誘いながら「コールサック」を始め詩と詩論などを初めました。詩論を書くようになって宗さんを中心とした戦争責任の問い続ける〈「戦後詩」ありか〉という詩論を書きました。

その流れの中で後に木島始さんの七三一部隊の詩とか大崎二郎だとかを評価したりもしたのですが。そして浜田知章さんと出会うことによって本格的に戦争責任を考えるようになりました。原爆だけじゃない、空襲・空爆を止めないと駄目だとか、つまり戦略爆撃ということを根本的に見直さなければ駄目なのだ、ということを実は浜田さんとよく話していたんです。

一九九七年に浜田さんと広島に行きました。今から十二年前にそこで浜田さんが「ヒロシマの哲学」ということを広島の詩人達の前で講演しました。その時に長津さんともお会いして、あと、御庄さんも紹介してもらって御庄さんとも一緒にお酒を飲んだりして、自分が研究している被爆二世、三世の論文も見せてもらったりとかしました。広島の街を小倉豊文の『絶後の記録』を片手に歩き回りました。そのときに頭にこのような本があればいいなと直観しました。

そうすると、十年以上かけてこれができたと言えると思います。そんな意味では志の高い詩人に会い、彼らの熱い詩的精神に触れたと思います。私は本当にそういう方達を後世に残すにはどうしたらいいかといつも考えていたのです。その結果が『原爆詩一八一人集』とか『大空襲三一〇人詩集』とかに繋がったと思うのです。いま来年発行のまた新しい企画を考えています。

そんな意味では本当に多くの詩人や関係者に感謝をしていますし、詩人を通して少し世の中に根源的なものとか本質的なものをこれからも投げかけていきたいと思っています。またこういうような企画があったら是非参加していただきたいし、『原爆詩一八一人集』も重要ですが、『大空襲三一〇人詩集』もこれは大量虐殺をやめるためにどうしても必要な空爆下の悲劇の歴史ですので、この本を日本だけでなく世界に広めたいと考えています。その方法論はいろいろご提案していただければと思っています。本当は『原爆詩一八一人集』と同様に全て英訳して英語版を作り世界の心ある人に読んでもらいたいです、実現できないのがとても残念です。しかし今日の集まりで皆さんの励ましをお聞きしていつの日か実現したいと心を新たにしました。

今日は本当に貴重なお時間を割いて来ていただき、ありがとうございました。今後ともよろしく願います。

《閉会の言葉》

山本十四尾 本日は遠方から駆けつけていただきまして、本当にありがとうございました。我々としては、皆さんのお力添えをいただきながらこういう本を出せて、それが一日一日市民の間に浸透していくというのが私達が考えている詩の運動体であります。いわゆる正義力を以て圧するということではなくて、自分達の感性で訴えながら国民のシンパシーを得ていくというような努力は短時間ではできません。時間をかけてやっていかないといけませんので、これからも皆さんのお力添えをいただきながら進めたいと思います。

今日はいろいろありがとうございました。これでこの会のお開きにしたいと思います。